

「種を蒔く人のたとえ」

2015年06月24日

ルカによる福音書 8章4節～15節。大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、／『彼らが見ても見えず、／聞いても理解できない』／ようになるためである。」

「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

主イエスは、押し寄せて来た大勢の群衆に対し「種を蒔く人のたとえ」を話された。「種は神の言葉である」と説明している。神の言葉である種をどのような土地で受け止めるかを譬えている。土地を4つに分類している。① 道端の土地。そこに落ちた種は人に踏みつけられ、空の鳥に食べられた。悪魔が来て、蒔かれた御言葉は心から奪い取られてしまった。道端だから、常識的で周りに流され、確かなものを掴みえない人ではないだろうか。② 石地の土地。そこに落ちた種は芽を出す、水気がないので枯れてしまった。御言葉を喜んで受け入れるが、根がないので、試練や苦難に遭うとすぐに身を引いてしまう。石地だから固く頑固で、自分を壊せない人ではないだろうか。③ 茨の土地。そこに落ちた種は茨と一緒に伸びるが、茨に覆われ成長できない。人生の思い煩いや富や快樂に覆い塞がれて、実を熟すことができない。徒な不安と欲望に翻弄される人ではないだろうか。④ 良い土地。そこに落ちた種は生え出て、百倍の実を結んだ。立派な善い心で御言葉を聞き、守り、忍耐して実を結ばせる人である。

主イエスは種を蒔く人の姿を遠くに見ながら、話したのではないだろうか。日常目にするもので、分かり易い譬えを語っている。そして、あなた方は良い土地のように御言葉を受け入れなさいと勧めていることに間違いはない。自分自身に問いかけ「私は ①だ、②だ、③だ」と謙遜に答えがちになる。主イエスは、イザヤ書6章10節の言葉から「彼らが見ても見えず、／聞いても理解できない」と、人間の心の頑なさを語っている。しかし、自分の不信仰を責めても、何も生まれてこない。不信仰を神の前にさらけ出すことが信仰である。不信仰と信仰の狭間で、御言葉の「命」を受け止める時、荒れた土地でも豊かな良い土地に変えられることを信じる。自分の土地の質ではなく、御言葉の命と力に信頼して立てば、実を实らせてくださると受け止めたい。